自閉スペクトラム症児の認知及び走能力について

佐藤　裕樹（東京都立王子特別支援学校）
櫻田　淳也（東京女子体育大学）

キーワード：知的障害特別支援学校、自閉スペクトラム、認知特性、走能力

1 はじめに

本報告は知的障害を伴う自閉スペクトラム症児（以下、A）の認知特性および走能力をスプリントの視点から分析し、指導の方向性を探るものである。

まず、DSM-5（アメリカ精神医学会）の診断基準では自閉スペクトラム症は「社会的コミュニケーション」と「限局された反復的な行動」の 2 つの側面から診断される。まず「社会的コミュニケーション」の障害とは、例えば言語によるアドバイスのみでは指示理解が困難であるとともに、非言語的なジェスチャー等での指導も理解が困難であると考えられる。また、「限局された反復的な行動」とは日常生活では「こだわり」として明らかになることが多いが、運動局面では「見通しのもちにくさ」から長距離走などで、ペースを維持して一定距離を走りきることの困難さなどが現れる。

そこで、過去の A への指導事例を改めて紐解いたところ、長期距離走に重点をおいて研究を行っていたが、短距離走においても自閉スペクトラム症児・者への指導方略が建てられるのではないかと考える。

2 方法

A は自閉スペクトラム症に特化したセスメント「太田ステージ」でⅡ―後期段階に属する生徒であり、抽象的な指示理解は困難であり、発達段階としては言語理解の芽生えの時期にある。

しかしながら、運動が大好きで、特に走る運動においては 1 位になりたいと積極的に走る生徒であった。しかし長距離走では、距離や時間と自分の体力の調整がむずかしく、知的障害特別支援学校の多くで行われる朝の時間走で心拍数やラップタイムを計測し分析したところ、15 分間走では心拍数 200 近くまで追い込んだ後に、一気にペースを落として 130 程度まで調整を図っていることが分かった。

一方、300m のコースを 5 周する 1500M などの決められた距離、周回数では、ある程度の見通しをもって、ペースのアップダウンも較的少なく走ることができることも分かった。なお、A の 1500M の記録を新体力テストの平均値と比較したところ、最新の調査結果よりも A の記録の方が高いことが分かった。

3 結果と考察

A は高等部 2 年次に都内特別支援学校、特別支援学級設置校からなる東京都特別支援学校・特別支援学級設置校体育連盟（以下、特体連）の陸上競技体大会において 200M で 6 位に入賞した。特体連への参加は各学校により部活動として参加したり、体育行事として学年全体で参加したりと対応は様々であるが、各種目入賞者の多くは特別支援学級等から高等部に入学した知的な遅れが比較的な軽度な生徒になることが多く、A のように小学部から特別支援学校に在籍する生徒が活躍することは稀であった。

A の参加に当たり、「少しでも長く競技場で全力を発揮する機会とする」ことを前提として 200M と 400M で検討した結果、A が「見通しをもって最後まで走り切る」、「全力で走っても体力的に持続でき、諦めずに走りきる」ことを理由に 200M を選択した。

大会に向けては 1 周 120ｍの校庭では体験できない、緩やかなカーブからの直線への立ち上がりについてのみ、特別にコースを作成し繰り返し、体験的に練習を重ね参加した結果、6 位入賞につながった。

学習指導要領の改訂に伴い、全校的な年間指導計画の充実とともに、個に応じた指導の充実が一層図られることが重要であり、実態によっては当該学年の前後の内容を取り入れた個別指導計画の作成が必要である。学習指導要領の改訂に照らし合わせ、知的障害を伴う自閉スペクトラム症児への指導には従前、特別支援学校で行われている一定時間を走る持久的な走運動よりも見通しをもって走ることのできる短距離でのシャトルランなどの方策を用いることで走能力の多様な発展の可能性が考察できた。